

かせられたので体力は維持できた。

昭和二十二年に入って高齢者、病弱者の帰国が優先され、同年十月、ナホトカから第三回目の船に乗せられ、同月十二日に舞鶴港に上陸、帰還することができた。

しかし、船中では、再びいづれかのソ連領に連行されるのではないかとの不安は消えず、船内の同胞は平穩を装っていたものの、心中は激しく動揺していた。

大丸藤井の会社では私が初めての召集者であったので、召集後、帰還まで私の留守宅に俸給が送られていた。

現在八十二歳となり悠悠自適の生活を送っており、軍隊時代の写真で往時を偲ぶこともあるが、ソ連での抑留生活は忌まわしい一時であった。

抑留記

東京都 金子亮輔

住 所 立川市曙町三丁目一一一九
生年月日 大正十四年八月一日生

現役入営 北支派遣軍衣第四二九五部隊

独立歩兵第四十四大隊入営（昭和十九年十二月）

昭和二十年六月北支より移動、七月より北朝鮮興南市に駐屯す。宿舎は日本人高等女学校。毎日、対米戦闘の教育を受ける。演習場は定平郡竜口里のハゲ山と奥地で、また昭和二十年八月八日「ソ連が対日宣戦布告」の情報が入り、ソ連戦軍に備えたが、八月十五日に終戦となる。我々は十六日に知る。

九月二日ごろ、武装解除となる。興南港にソ連の貨物船が入港する。日本軍の糧秣や衣類等を、日本軍將校を除いて毎日から出され、倉庫より船に使役として運んだ。

昭和二十年九月ごろ、日本へ帰国するのだと乗船命令を受け、ソ連兵がついていた。連行された所はウラジオストックで、港に上陸。市内を巡って対岸の丘の上にあるラーゲル（収容所）に。地区はわからない。九月二十日ごろだと思います。

シベリアは九月に入ると日本と異なって寒い。収容

所は三重に有刺鉄線で囲まれ、四隅の高い櫓^{やぐら}には歩哨（チツポボーイ）が自動小銃を抱えて立っている。カザルマー（兵舎）又は収容所と言う。入る前に服装及び所持品の検査があり、二百人くらい入れる粗末なものであった。ペチカが東、西に一つずつあった。一週間は収容所を修理したり、環境の整理をした。その後、ラポート（労働）に出る。芋掘り、製材所、ドース（家造り）、レンガ積み、左官や大工は前職を生かしての作業である。

毎朝五列縦隊に並べての点呼。人員掌握で寒い中一時間近く立たされる。やりきれなかった。

食事は黒パン一切れ、雑穀のおかゆと塩漬けにしたキャベツのスープなどであった。一日も早く内地に帰りたい一心である。日本は、家族は、どうなっているのか、心配である。ニュースは全然入らないので、帰ることだけが生きる希望であり、心の支えであった。

昭和二十一年になると、冬の寒さは我々の考えていた以上に寒く、栄養失調、気管支炎、気管支系統の病気や肺結核等の病気が増加して、死亡者が続出した。

ソ連のマダムドクトル・マイヨール（少佐）が、常勤で抑留者を診察した。日本人の軍医も一緒である。患者は熱が三八度以上ないと、その日の作業を休ませてもらえなかった。痔の患者は、どんなに病状が悪化していても作業は休ませてもらえませんでしたので、仲間同士で助け合いながら、内地に帰るまでは絶対に死ぬまいとお互いに励まし合った。

入浴はシャワーで、夏は近くの川で水浴するだけで粗末である。衣類は日本軍隊の分捕り品で、新しい服やシャツ類は全部ソ連の地方人が着服し、日本人は古物を支給される。いかにソ連には品物が不足していたかがよくわかった。

昭和二十二年になるとノルマ（仕事量）を指定するようになり、作業は厳しくなってきた。このころから「スタハノフ社会主義生産運動」が展開されて、期間は一カ月であるが、終わっても「ノルマ」は止めなかった。

そのうち私はマラリアと壊血病に罹り、ウラジオストックのウリウスの病院に入院したが熱が下がらず、

ウラジオストックの中央病院に移された。この病院は、各地区、地方より送られてきた日本人の患者が大勢いた。日本の軍医と衛生下士官数名と、後はソ連の軍医が数名いたようである。さすがに栄養失調、肺結核などで、後は作業場での怪我で体が弱っているの、なかなか治らないようである。日本人の死亡者は、ソ連の軍医、日本の軍医の立ち会いのもとで解剖された。私の戦友、野口賢次も一緒に入院したが死亡してしまった。そうこうしている間に私の体も回復し、退院した。昭和二十三年四月ごろだったと思う。

行く先はウラジオストックの街の中にある、港の造船所の所に繋がれている「サマルカンド」という船の収容所である。貨物船で、中に日本人が百五十人ぐらいいいたと思う。人体、千島列島方面にいた陸海軍の兵隊であった。日本人は街の中にある工場及び造船所へ作業に出た。一番重宝がられた電気、建築関係、特に電工、大工、建具屋などの人々は、労働に対する報酬があった。後は樺太（サハリン）より来る貨物船の修理と掃除、私は俗に「かんかん虫」と言う「ペンキ塗

り」の作業に、又は日によって掃除の方に回された。人数は一個班十五名くらいだったと思う。

昭和二十三年に入ると、日本人の食物は若干ではあるが落ち着きを取り戻し、食料事情も一応国際法に沿った物が支給されてきた。日曜日には演芸が始まる。「浅草の灯」など、演芸の好きな人々が役者となって一般に見せてくれた。また相撲大会などを行った。

このころになると、民主的な運営に切り換わる選挙で代表者が決定した。各中隊にも責任者がそれぞれに決まった。また「アクチブ」の人々は、どういう人選でこういう人が選ばれたのかが私にはわからなかった。日本新聞や「テキスト」はハバロフスクで編集されたのだという。朝、作業に行く前、又は夕食後に必ず、帝国主義又は資本主義を批判する講義が行われた。講義を聞かないと帰国はできないような流言飛語が日常茶飯事となった。この「オルグ」の人々は共産党史等も勉強会を行っていた。

昭和二十四年の正月となり、一日だけは休日になる。平凡な毎日が続く民主教育、厳寒のシベリアでの労働、

皆が異口同音に言うことは、「早く内地に帰りたい」の一言である。

四月下旬ごろだったと思う、責任者の方に呼び出され、事務所にて内地帰還を言い渡された。その時は二十人ぐらいだったと思う。二日後に環境整理をして、船のラーゲル「サマルカンド」を後にした。ウラジオストクの街の中の駅に着くと、ウラジオ付近のラーゲルから来た日本人と一緒に、ソ連の責任者と日本の責任者と通訳がついて、一路ナホトカに向かった。人員についてはわからない。ようやくナホトカに着いて収容所に入った。

人間は現金なもので、帰国が目前にあるということに精神的に元気が出てきた。ところがそうはいかないで、別の宿舎に回された。皆心配した。そうしたら「ソ連の関係者とオルグたち」（日本人）の民主教育が始まった。昭和二十四年六月のことである。帰国前にしてまた難題である。日本に帰すかどうかの選別のようなものである。一週間ぐらい続いたと思う。残された者もいたようだという人もいた。我々のラーゲル

から来た人は残されずに、第一く第三収容所を通過した。もちろん、身体検査やら荷物の検査等が厳密に行われた。

夢に見た日本の船だ。「山澄丸」が岸壁に横づけになって、日の丸が見えた。涙が出た。その時、二十四歳であった。四年近くもシベリアで労働させられて、「ウソ」をつかれ、つかれ、きたせいか、乗船するのも一瞬疑った。日本の船員を見ていくらか安堵した。中にはまだ信用できない人もいた。船は出港した。

離れ行くナホトカを見て、ようやく日本へ帰れる、夢のようだ。一昼夜くらいかかったのか、夜明けとともに日本の山々がかすかに見えてきた。だんだんと近づいて、本土の海岸の松の緑が一段と目にしみた。万歳を叫んだ。昭和二十四年六月、民家の屋根も見えてきた。日の丸の旗を振って歓迎してくれる方々も見えて、舞鶴港に着いた。桟橋に白衣を着たお医者さんと看護婦さんの方々と、また多くの方々が迎えに来てくれた。船を降りて旧海軍の兵舎に入った。

張りつめていた気持ちが一度にどっと崩れて、茫然

とした。三日間くらい滞在し、身体検査と軽い調査を受けた。特別臨時列車にて一路東京に向かった。途中の停車駅にて歓待を受けた。私は品川駅にて下車し、家族が迎えに来ていたので一路立川に帰った。ようやく自宅に着いて落ち着いた。

その後会社勤めだが、今は定年後で余生を送る。至極健康で現在に至っている。

最後に、異国に眠る亡き戦友の冥福を祈り、ペンを擱きます。

私のシベリア抑留

神奈川県 池田秀良

昭和二十年二月、東部第二十二部隊に入隊し、七日後、満州虎林に移動、満州第三一〇七部隊となった。物資不足の折柄、地下足袋をはかされ渡満した。二月ともなれば北満は極寒の地、足の冷たさに往生した。早速と厳しい初年兵教育が始まった。古兵からの制裁

あるものと覚悟していたら、それがなかった。部隊長より嚴重に、私的制裁禁止の命令が出ていたとのことだった。

初年兵教育終了と同時に、虎林陸軍病院に衛生兵教育のため派遣された。ところが間もなく病院は牡丹江に移動した。今思うと、上層部はソ連の侵攻が間近のことを気付いての移動だったかもしれない。原隊は虎林から穆稜に移動布陣していたが、その後、^{えきか}掖河に移ったと後から聞かされた。当時の戦況は連合国側の攻勢で、もはや日本の運命は決せられたかのような状況だった。ずる賢いソ連のこと、この機会を見逃すはずがない。

昭和二十年八月九日未明、中立条約を無視したソ連軍は満州全土に侵入して来た。主力部隊を南方戦線、本土防衛へと送り出した関東軍には既に戦の余力なく、全戦線で後退を余儀なくされていた。ここ牡丹江にもソ連機が飛来、各所に爆撃を加えられた。小銃で反撃を加えたが、どうにもならない。

敵の地上部隊も刻々間近に迫っているとのことだった。